

染められたオタク女子  
カリチーセンパアのぼうが  
男として優れているのよ

オマケノベル

この小説はあくまでも架空の物語であり現実とは一切関係がありません。また小説内で描写される行為を実際に行った場合、パートナーが傷ついたり、刑法上あるいは民法上の罪に問われる可能性があります。また、この小説はあくまでも成人向けであり、未成年に閲覧させるべきではありません。

## 内容

四月：テニサーとの出会い.....	4
音声第一部	
八月：軽井沢：テニサーの夏合宿で.....	32
音声第二部	
九月：キムラ先輩のコミュニケーション向上キャンプ.....	56
音声第四部	
十一月：セイナのスペシャルバスデーパーティ.....	78
音声第五部	

四月：テニサーとの出会い

わたし中峰聖菜（なかみね せいな）はこの春から上京して東京の大学に進学します。一人暮らしは結構心配だけど、田舎と違って話が合う人もきつとたくさんいるだろうし楽しみです。なんとかやっていける…よね？

大学初日、各サークルの激しい新歓活動にちよつと…というか、かなり引き気味。やっぱ都会の人ってエネルギーがすごいいけど、ちよつとだけ怖いかな。そう思ってたしは大学の正門の方は避けて裏門の方から出ようと思いました。そこで少し小さなサークルが地味に勧誘しているのを見つけました。

『ゲーム研究会』『エフジア好きな人集まれ』とプリントアウトした紙を持った数人の男の人が立っています。『エフジア』は最近流行っているスマホのオンラインゲームでわたしも好きなのですが田舎にはほとんどプレイしている人がいないのもつばら一人でネットの情報を見ながらプレイしていました。『ええもなんだか怖いし…。でもせっかく大学生になって都会に出てきたんだから勇気を出すときかもしれません。』

「あ、あのー、その、ゲーム研究会って…」

もう緊張して舌が思うように回りません。

「ひゃあいつ、え、あのゲーム研究会はですね…」

でも話しかけた相手の方が同じぐらい緊張して噛み噛みだったので思わずお互いに目を見合わせて少しコミュ障同士のシンパシーを感じます。そしてゲーム研究会が基本的には放課後部室でエフジアをプレイするだけのゆるいサークルで夏と冬のイベントに考察系の同人誌を持っていっているのと知ってここならわたしでもいけるかも…と思ってしまいます。

そしてそのままなんとなく崩し的にゲーム研究会、通称『ゲー研』の新歓コンパに参加することになりました。

「えっと、あの、その…わたし、中峰聖菜といいます。えっと…英文科の1年生です。その…今回は誘ってくださってありがとうございます。…田舎から上京したばかりで、わからないこととか困ってることが多いです。あの…その…もしかしたら先輩がたにご迷惑をかけちゃうかもしれませんが…よろしく願います。」

あの…わたしの地元では…年代の人がほとんどいなかったもので、こんな風  
にリアルでゲームができるお友達を作るのが夢だったんです。わたしもゲーム  
スマホゲームですけど特にEGIAが好きで、えつと…こんなにくさんのゲーム  
研究会の先輩たちと繋かれるなんて夢みたいです。高校時代とかはもう、好きな  
キャラをガチャで引き当てるためにアルバイトしたりしてですね。でもあんまり  
わかってくれる人がいなくて、だから本当に嬉しいです。特に好きなキャラはギ  
ルさんで、でもでも周りでわかってくれる人とかあんまりなくて、今日は新歓  
ブースで声をかけてくださったときから話が弾んじゃって、もしかしたらわたし  
興奮し過ぎでちよつと暴走気味かもしれないんですけど、嬉しくてできれば今後  
もずっとゲーム研究会で仲良くしていただければ本当に嬉しいなと思っています。  
…あ、あのすみません。ちよつと話し過ぎちゃいました。こんなに同じ趣味  
の人と出会うことが今まで出なかったから興奮しちゃって」

顔から火が出るほど、というのはこういう状況でしょうか。緊張しすぎて自分  
が何を言っているのかもわかりません。なんだか胸がドキドキして緊張のあまり  
ふわふわとした気分になってしまいます。つというのも来てみてわかったのです

が、ゲー研には女性の部員がわたししかないのです。だからかゲー研のなかでも部長さんたちのような一部の部員しか話しかけて来ません。でも、わたしも何を話していいのかわからないのでおあいこです…たぶん。

でもお互いそんなコミュニケーション感でも飲み会の席でスマホをあけてゲームしても大丈夫なゆるさは救いです。ゲーム用のゲー研のチャットで挨拶したらリアルよりもたくさんの人達が挨拶してくれました。

ちよつとぎこちないけれど、もう少しだけこのサークルで頑張ってみようかなと思いました。

その日、わたしは講義が終わってゲー研の部室に向かっていました。高校と違って制服のない大学では服を選ぶのはいつも大変で、それでも大学生らしくなきゃと今日は薄手の白のワンピースです。高校時代は美術部で喪女どうしでつるんでいて暗めの地味な服ばかり着ていたんですが、東京の大学に進学したので少しは自分を変えなきゃと一大決心して昔の服を全部捨てて東京で買い直しました。

そんな風にちよつとした大学デビューのつもりだったんですが、結局新歓の時期の大手サークルの強引な勧誘に引いてしまつてゲー研に入つてしまつたあたり我ながら変わりきれてないなとため息です。

「キミ、カワイイね」

そんな風にいきなり後ろから声をかけられたのです。振り向くとそこにはいかにもモデル体型なイケメンの男の人が何人か立っていました。

「え、わたしですか？」

そう思わず聞き返します。わたしの人生でいきなりこんな風に褒められたことがなかったので心のなかで混乱してどうしていいかわからなくなつてしまいます。

「モチーキミ以外に誰がいるのさ」

そう言つていきなり距離を詰められてしまいます。隣に立つてわたしよりもだいぶ高い身長から見下ろしてきます。先輩…なのかな？

「オレらさ、これから飲みに行こうって話してたんだけどさ。女子があんまり来られないみたいなんだよ。男ばっかじゃ寂しいんでキミみたいな可愛い女の子を



誘えないかなって話してたんだ。あ、もちろん飲み代とか足代は全部オレらが出すから気にしないでいいぜ」

そう、声をかけてくれた男の人が言います。髪を明るく染めて、背が高く、鼻筋が通っていてまるで雑誌から抜け出てきたみたいです。

「そうそう、もてないオレらを助けると思ってた来てくれたらマジ嬉しいんだ」

反対側に最初の男の人とは別のものとガツチリとして筋肉質な見るからにスポーツマンの男の人が立ちます。他にいたあとの男の人達もまるで行く手を遮るようにいつの間にかわたしの前に立っています。みんな最新のファッションできめていて、びっくりするぐらいカッコイイです。

わたしが密かにした大学デビューがやっと人に認められたことと今までの人生で一度もなかったくらいハンサムな人たちに囲まれたことでわたしは少し調子に乗ってしまったていました。

「す、すみません、あの…わたしこれからサークルがありますから…」

ドキドキしながらそう言います。

「あちゃー、振られちゃったかー」

男の人達が爆笑します。

「キミ」年生でしょう？この時期は新歓期で人の出入りが激しいから「一回くらい休んだって大丈夫だよ」

誰かがそう言つて。みんなが口々にそうだと肯定します。『でも…』  
と言いかけたわたしの言葉を遮るように最初に茶髪の男性がいいいます。

「サークルには新人生が他にもいるけど、オレらにはキミしかいないんだ」

そうわたしの肩を掴んでまっすぐ目を見て言われます。最初に一瞬肩を抱き寄せられたときはビクンと体を震わせてしまいましたでしたが、まるで少女漫画みたいなシチュエーションに胸がドキドキしてしまったのも否定できません。その茶髪の先輩の服からはふわりといい香りがします。肩を掴まれると男の人の大きな手を意識してしまいます。

「えつと…わ、わかりました。行きます」

拒絶するはずだったのにわたしの口から出てきた言葉は真反対でした。

「おー！」「よく言つた！」「こんなカワイイ子と飲めるとか最高すぎんだろ！」

などと肯定的な言葉が投げかけられて戸惑つてしまう。今までの人生で言われたカワイイを全部足したよりもたくさん既に言われてしまった気がします。

そのままその先輩達は大学の入口でタクシーを呼び止めると、台に分譲して乗り込みました。タクシーはいつもゲー研が飲み会をする駅の方とは逆方向に向かいます。まだこっちに引越してきたばかりのわたしはどこに向かっているのか少し不安でした。

「オレはキムラっていうんだ。それでも既に3年生なんだから。ちなみ周りからはキムってよばれてる。仲良くしてくれよ!」

「先輩、見えないっすよ!」

などとまるで高校生のような会話を繰り返している男子達。キムラ先輩は相変わらずわたしの肩を抱いたままです。

「キミの名前、教えてくれるかな」

そう言う先輩。

「中峰聖菜っていいいます」

「セイナちゃんか」。名前もすごい可愛いね。これから行くのはオレらの御用達のちよつと高めの居酒屋だからさ、楽しみにしててよ。そこらの新歓じゃあ、駅前の安い飲み屋が普通たる、これから行くところは全然ちげーからな」

「あ、あの先輩達って何のサークルなんですか」

うまく会話の流れについていけずになんとかそう聞きました。

「あ、オレら？ テニスサークルだよ」

ゲー研の先輩方にテニサーは危険だから近寄らないほうがいいとアドバイスされていたことを思い出します。

「あー、セイナちゃん。なんか悪いこと考えたでしょ。オレらの人気に嫉妬して他のサークルでオレらの悪口が流れてるっぽいんだよね。そんなの気にしないでよ。オレら、ちょー紳士な集まりだから」

「そつすよ。オレら以上に紳士なサークルなんてウチの大学にないつすよ。あ、オレ経営学部の年のリョータって言うんだ。セイナちゃんよろしくね」

そうさつきわたしの隣に立った筋肉質な男の人が言います。

「ほら、うちのサークルはイケメンが多いから女の子が集中しちゃう傾向があるんだよね。だから他のサークルが女子を確保しようとして悪い噂を流すんですよ。つっても今日みたいに女子が全然都合つかないときもあるっすから言うほどでもないんですけどね」

「ウチのサークルの読モ率高すぎっからな」

「それ先輩が言うんすか？」

「バカヤロー、オレは読モじゃなくて普通にモデルとして働いてるわ」

「先輩ってモデルなんですか？」

「まっ、ただのバイトだけどね」

道理でカッコイイと思ってしまう。普通に喋っているだけでも爽やかな先輩の顔立ちが魅力的で肩にかけられた手もいやらしい感じは全然なくて普通にエスコートしてくれている感じがする。

タクシーが停まったさきはちよつとおしゃれを意識した隠れ家的なバーだった。

「キム、おっそいよ」

そうお店の中に入ると声をかけられた。センパイっぽい女の人でびっくりするぐらい美人。ちよつと露出多めの服を着ているけど、スタイルが良すぎて全然それが嫌味になっていない。おもわずため息が漏れるくらいきれいなセンパイだった。

「キム、この娘は？」

「あー、こっちに來る途中で拾った子猫ちゃんさ。新入生のセイナちゃんだぜ」  
「ふふ、今晚のおかずね。」

はじめましてー。あーしは経営学科二年のユウコって言います。仲良くしてくれると嬉しいな」

そう言つてユウコ先輩がわたしの肩を掴んで抱き寄せます。さつきからこの人達ホディタツチ多すぎてわたしは緊張してほとんど喋れません。

「うわー、セイナちゃんスタイルいいねー。オッパイマジデカだー」

そういつてユウコ先輩がムニムニと男の先輩たちの前でわたしの胸を揉みしだきます。

「んん…先輩、やっやめてください」

「いいじゃんいいじゃん、減るもんじゃないし。女子同士だし」

そういつてユウコ先輩がセクハラしながらわたしを席に引っ張っていきま  
す。どうやら今日のこの店は先輩たちが貸し切っているみたいです。

そして結構高そうな料理がコースで出てきて、みんなはしゃぎながら食べて  
いきます。男子のノリがよくて、どんどん話が弾んでいきました。そして時々つ  
いていけないわたしに対する配慮も忘れません。それにユウコ先輩もセクハラは  
多いけどいつもわたしから会話を引き出してくれて、気がつくとなわたしはその空  
間をとめても気持ちよく感じてしまっていました。

そして、途中でキムラ先輩がわたしのグラスにお酒を注ぎ始めます。はじめ  
はお断りしようとしたのですが、今日ここに誘われた時みたいに気がつくと思  
流れになってしまいました。しかも途中から女子の先輩たちが合流してきて、や  
っぱり皆さんわたしのことを口々に褒めるんですから余計にネガティブなことを  
言いつらい感じになってしまいます。

結局、途中からわたしは注がれるがままにワインを飲んでしまいました。  
「セイナちゃん、楽しい?」

そろそろ夜も更けてきたときに、そうキムラ先輩がわたしに聞きました。

「はいっ！ たのしーです！」

お酒が入ってテンションが上ったわたしはその場のノリでそう答えます。

「オレらもセイナちゃんと飲めて超楽しーぜ。セイナちゃんテニサーに入らない？」

そう言いながら肩を抱いていたキムラ先輩の腕がおりてきてわたしの胸を触り始めます。でも、わたしは酔っぱらっていい気分で、なんだかそれもどうでもよく感じてしまっていたんです。それにさっきまでユウコ先輩がワシヤワシヤもんでいたのでもう別に気にならなくなっていたのかもしれない。

「はい、入りますう！」

聞かれるがままに答えてしまうわたし。なんだかポカポカして気持ちい感じです。

「あー、こんなに酔ってたら入部届け書けねーな。よっし、代わりに動画で記録しよっか」

「もー、しんじてくだしゃいよお。はいるったらはいるんですう」



「ああ、信じてるぜ。ほらこっち向いて。学籍番号、フルネーム、それからスリーサイズを言つて、テニサーに入りますつて言つてよ」

リョータ先輩がスマホのカメラをこっちに向けています。いつの間にか人数が増えていて三人近い男女がみんなこっちを見えています。ふらふらで気持ちいいのに任せてわたしはキムラ先輩に胸を揉まれながらテンションに任せて言う。

「が、がくしえきばんごうの18765、なかみねえ、しえいなです。すりーさいずはあ、上からはちじゅーに、ろくじゅー、はちじゅーさんです。テニサー入部希望です。みんなーよろしくねー」

「オッケーこれで証拠画像ゲット。セイナちゃんちよつと酔い過ぎてっからそろそろ帰ろつか」

そうキムラ先輩が言います。

「ええ。わたしはまだだいじょぶですよ、いえーい！」

楽しい雰囲気にならされて普段のわたしならありえないくらいテンションが高くなって、そう言うわたしのことを抱きしめてキムラ先輩が爽やかな顔でわたしを見つめていいです。

「オレが送っていくからさ。許してよ」

「もし、しえんぱいを送ってくれるんだとしたらしかたないですねー」

イケメンの先輩に抱えられながらわたしはタクシーに連れて行かれます。

移動中いつの間にか寝てしまっていたようで気がつくとなわたしは知らないベツドの上にいました。先輩達と目が合います。みんなニヤニヤわたしを見下ろしています。

「大丈夫？ 酔いが覚めた」

キムラ先輩がそう聞きます。

「はい、えつと……大丈夫です」

なんだかぼやとした頭でそう答えます。

次の瞬間下半身で感じたことのない感覚が起こります。

「ヒヤァンッ」

思わず声が出てしまいます。

「セイナちゃんのこっちももう大丈夫だよー」

そういったのはユウコ先輩でした。意識がはつきりした瞬間、自分の姿を見たわたしは衝撃を受けます。なんとわたしは服を脱がされてテニサーの男の人達に見下ろされていたのです。しかもユウコ先輩がゆつくりとわたしの恥ずかしい場所を舐めていて、そのたびに穏やかな快感が下半身から登ってくるのです。

「えっ…」

思わず絶句したわたしに向かってキムラ先輩が言います。

「あー、気づいちゃったか。セイナちゃんって鈍い方ですよ。まっオレらはそっちのほうがいいけどね」

頭の中がパニックで何を言えいいかもわかりません。反射的に逃げようとしします。

「こらっ、どこに行くのお？それにセイナちゃんのここは鈍くないよ。ってか超敏感だし」

そういつてクチュクチュと音を立ててユウコ先輩がわたしのお豆をクリクリと舌先で潰します。

「ヒヤアンっ!」

声が無意識に出てしまいます。

「や、やめてください!」

逃げようとしてもユウコ先輩がわたしの足を掴んでいて逃げられません。

「いい感じだし、はじめっか。『テニサー新歓合宿』人目。田舎から出てきた上京女子中峰聖菜ちゃん編」あ、カメラ目線よろしく。ピースとかしてくれよ」  
リョータ先輩がカメラを持ってわたしの前に来ます。

「やめてください!撮らないでください!」

必死でわたしは叫びました。

「セイナちゃんちよつとノリ悪くね?ほら、せっかくオレの部屋で二次会宅飲み、つてかパコ飲みなんだから飲みなよ!よくなるまでこれでも啜えてよ」  
叫んでいたわたしの口に布が押し込まれます。そしてキムラ先輩の大きな手がわたしの両手首を捉えます。

手を掴まれてユウコ先輩に足を掴まれているわたしは抵抗できません。

「セイナちゃんのノリが良くなるように誰かウオッカ取ってよ」

キムラ先輩がそう言います。

わたしの口に押し込まれた布にキムラ先輩が強いお酒を垂らしていきます。

呑みたくないのに布のせいで口が閉じられませんか、お酒はどんどん布にしみていきます。辛いお酒の味が舌いっぱいに広がってしまいます。

「おっけーおっけー。じゃあセイナ、暴れていいぜ。オマエが暴れば暴れるほど酒が回っていい感じになるからな。」

んじゃ、オレがセイナの初めての男になっちゃいますー！」

軽いノリでそんな恐ろしいことが宣告されてしまいます。先輩の大きくて重い体がわたしの上にのしかかってきます。一生懸命もがいているのにそんなの関係ないかのように熱い汚らしいものがわたしの割れ目にあてがわれます。

「キム、オーライ、オーライ。そのままおろしてってセイナちゃんのピツタリと閉じた処女マンにいっちゃうよー！」

ユウコ先輩の指がわたしの下半身に相変わらずあてがわれているのを感じます。キムラ先輩の男性器を誘導しているみたいです。

ゆつくりとキムラ先輩の体の一部が侵入して来るのを感じます。恐怖に思わず目をぎゅつと閉じてしまいますが、状況が変わるはずがありません。

「セイナのヴァージン感じるぜ。オレラのためにとつといてくれてありがとうな」

キムラ先輩が酷いことをしているのに優しい声でそういます。わたしはもう首を横に振って拒絶する以外できませんでした。

「んじゃ、いただきまーす」

次の瞬間痛みが走ります。痛みからもがいても遅いキムラ先輩にはかなうはずもなく組み伏せられた体勢のまま我慢することになってしまいます。

「ほら、ゆつくりならしてやるからさ。力抜けよ。ってかまた酔ってるよな。セイナちゃんお酒弱いね。カワイイよ」

菌の浮くような言葉。でもその通りわたしの体はなんだかふわふわして力が入りません。そしてそのせいで痛みも…。

「あー、セイナの中いいわ。今週は人目の新入生だけど一番セイナが気持ちいいわ。おっぱいもでけえし。今年の新入生女子で一番いいぜ」

そんな酷いことを言いながら先輩がわたしの体にキスの雨を降らせます。

お酒のせいで力が抜けて抵抗できないわたしを押し倒したくせに……。そしてゆっくりと先輩の腰使いが激しくなってきます。力の抜けたわたしの腰をベッドに叩きつけるみたいにパンッパンッと腰が打ち込まれ、徐々に痛かっただけなのが熱くなってきます。全身が火照って切なくなってしまう。ダメなのに……。こんなに無理やりされてダメなのに……。それなのに痒いような快感を感じ始めている自分が嫌になります。

「おお、気持ちよくなってきたんだなセイナ？顔に出てるぜ」

そうキムラ先輩がその整った顔でいいいます。わたしは認めたくなくて顔をそむけてしまいます。

「おお、いまキュッてしまったわ。セイナはコミュ力低くてもセイナのマンコはマジコミュ力高いぜーもっともっと気持ちよくなりたいってオレにラブラブ吸い付いてきてるぜー」

そ、そんなの嘘。それなのに確かにわたしはどんどん気持ちよくされていつてしまうのを感じてしまいます。お酒のまわりきったぼうつとした頭に下半身から湧き上がるはじめての感覚が沁みてきます。

「じゃあオレラテニサーのコミュ力をセイナに教えてやらなきゃな。ユウコ、パンツ吐き出させてやれ」

「ふふ、セイナちゃんもうエロエロな感じだつて分かつてる?」

ユウコ先輩がわたしの口の中に押し込まれていた布を取り出します。なんとそれはわたしの下着だったのです。

口から異物を出され、新鮮な空気が吸えます。でもそれと同時にわたしに覆いかぶさっているキムラ先輩の汗やいやらしい匂いがまるで液体みたいな濃密さで感じられてしまいます。

「ああ…ひゃああんつつ…ああああん!」

溢れ出てしまうわたしのはずかしい声。

「セイナは感じていないんだよな?」



そうあてつけに言いながらキムラ先輩が激しく腰を振り下ろします。その瞬間電流のように快感が全身を走って声が勝手に出てしまいます。

「ひゃああいいい、感じてえ…あああんませんっ！」

「ああ、かわいいぜ、セイナ。マンコのほうはこんなに正直なのにな」

そういつてまるでぐるぐるかのようにわたしの体をベッドに押し付けて、ぐつと深くわたしの体の奥深くまでずんずんと貫いてきます。まるでキムラ先輩の男性器の形がわかるほどにゆっくりと深く押し付けられてわたしはぼやとした快感を埋め込まれてしまいます。

「キス」

そうキムラ先輩が優しく言ったときに、わたしはほとんど本能的に自らキムラ先輩の唇に自分の唇を重ね合わせてしまいました。今まさにわたしを騙してレイプした最低の先輩なのに…。

わたしの唇をチュウツと吸ってそのままキムラ先輩の舌がわたしの中にレロレロっと入ってきます。上と下の口でキムラ先輩に侵入されてわたしはもうなにがなんだかわからなくなってしまうです。

チュプっチュパッチュルルルつと甘く時間をかけてゆっくりとわたしの中に侵入してきたキムラ先輩の男性器がわたしの拒絶の皮を一枚ずつ剥ぎ取って、気持ちいいと感じている動物的な一匹のメスでしかない恥ずかしいわたしだけにしていってしまいます。

その間もキムラ先輩の男の部分はずっぷりとわたしの中に打ち込まれ、まるで体の内側からよしよしするようにわたしのはずかしい一番奥をなでているのです。

そしてキスをしながらゆっくりとキムラ先輩のモノがでていくのを感じます。こんなに長かったんだと思えるほどにわたしのヒダヒダがキムラ先輩のものが出かかる数秒間刺激され続けます。そして次に感じたのは寂しさでした。熱くて太くて長いその部分が出ていった場所にポツカリと空いてしまった空洞。まるでわたしの寂しさを強調するように絡みつくキムラ先輩の扇情的な舌使い。

しかもその舌さえもゆっくりとわたしの中から出ていこうとしています。オナナのわたしとしての寂しさを感じてしまいます。

「なんだ、セイナ、物欲しそうに…」

そうキムラ先輩が言います。わたしを騙した卑怯な最低の男の人。それなのに、それなのに心の何処かで求めているわたしがいます。

次の瞬間、わたしの中から抜かれてしまったキムラ先輩のものが一気に深く叩きつけられます。

「ひやアアアンンンん！」

取り繕う隙もなく、わたしの声が漏れてしまいます。

「あああん！はあ…はああん！…ふあああん…しゅごいい、しゅごいい！ひゃああん、かんがえられなくなってましゅう！」

二氣に責められてわたしはもう耐えられなくなつてしまいます。

「ふふ、セイナちゃんのスケベ顔イイネ。考えなくていいのよ。メスはオスに支配されてればいいの」

そうユウコ先輩がわたしの顔をスマホでパシャパシャ撮りながら言います。

わたしはそれに反応することもできず、ただただキムラ先輩の腰使いに体を預けてしまいます。

「ひやあつ…あああんんつはあ…ふああんん！しゅごいいい…な、なんかあ…熱いの熱いのクルクルクルうううう！」

「おおお、セイナのマンコが痙攣してきてるうう。やべええ、これよすぎる」

「ひやあああんんん熱いのキテルうううううう」

部屋いっぱいにわたしのエッチな叫び声がこだまします。いままで感じたことのないほどの気持ちよさに包まれて全身が脱力してしまいます。お酒だけでなく、ジンジンと続いた絶頂の虚脱感にうちのめされて、先輩の汗の染み込んだベツドにそのまま体を横たえています。

ゆっくりと先輩のものがわたしのなかから抜き出されるのを感じます。先輩の太いものがなくなつた場所に入ってくる外気を感じて少しだけ寂しくなつてしまいます。

ベチャツとわたしのお腹に滑つた熱いものが置かれます。目を上げてみればわたしのお腹の上に先輩の使つたコンドームが無造作に置かれていて、白い男の人の匂いを漂わせるものが垂れています。

「おいお前ら、撮影すつぞ。セイナの処女喪失記念だ」

そうキムラ先輩が言つて先輩たちが詰まつてきてわたしを取り囲みます。

「セイナちゃん、処女喪失おめでとう」

「これでセイナも大人じゃん」

「もっとガンガンせめて行こーぜ、イエえーい！」

そう口々にわたしが処女じゃなくなったことを先輩たちが褒めます。

「おら、撮影すつぞ。次のエッチでセイナの男性経験は？」

「「にー」」

酷い掛け声とともにみんなピースして笑顔でわたしの裸の写真を撮影されてしまいます。

「そんじゃ、これはうちのサークルの裏チャットにシェアしとくわ。次はリョータだっけ？」

「うっす。」

じゃあセイナちゃんよろしく！」

そういつてリョウタ先輩がわたしにのしかかってきました。体育会系の大きな体の下でわたしは抵抗できません。

翌日、異臭で目が覚めると、見たことのない部屋にはじめ戸惑いました。そして起き上がった時に自分が何も着ておらず、更にわたしのまぐらの周りにこれ見よがしに捨てられた大量の使用済みコンドームに気が付きびっくりしました。嗅ぎ慣れない匂いはそこから出ていた男の人の生臭い臭いでした。

呆然として目の前が真っ暗になったようなショックを受けて思わずフリーズしてしまつたわたしの隣でござんそ音がします。そこにはやはり裸のユウコ先輩が寝ていたのです。

「おはよう、セイナちゃん。」

昨日は激しかったよね。うわあ、何このゴムの飛び散つた部屋。あいつら片付けずに帰つてつたな！。

大丈夫？セイナちゃん？泣いちゃつてるの？

おおよしよし、向こうにお風呂があるから体を綺麗にしてください！」

そうユウコ先輩が元氣つけるように優しく薦めてくださいます。シャワーを浴びようとして、着てきた下着がないことに気が付きました。

「これ、使って」

そういつてユウコ先輩がかなりセクシーな未使用のブランド物の下着を差し入れてくださいました。

そしてわたしがシャワーから出てもなお残る下半身の違和感を気にしつつきちんと身だしなみを整える頃にはユウコ先輩が部屋の掃除を終えてきれいになっていました。

「じゃあ、ランチでもいいこっか？」

セイナちゃんのロストヴァージンのお祝いだし、あーしがおごっちゃうぞ！」

そう大人っぽい顔立ちのユウコ先輩がニコツと笑っています。わたしは今の大学で最初に出会った女の子の先輩としてユウコ先輩にすがりたい思いがします。

「ロストヴァージンのお祝い……？」

それでもユウコ先輩にも不信感がないわけではありません。昨日からずっとキムラ先輩のフォローを続けていたユウコ先輩。

「そつ、今時厨房のうちにヴァージンなんて捨ててるもんつしよ。セイナちゃんがいまだにもってたなんて驚きだし、そんなの邪魔なだけじゃん。もう大人なんだよ？男女のコミュニケーションはぺちやくちやおしゃべりするだけじゃないつしよ」

涼しい声でそういうユウコ先輩。そこでわたしはわかってしまいました。多分ユウコ先輩がずるいんじゃないかときつと都会ではそれが普通なんだということに。きつとわたしが田舎者過ぎてコミュ障すぎるだけなんです。

八月・軽井沢：テニサーの夏合宿で…

それから気がつけば夏になっていました。わたしは結局テニサーとゲー研を兼サーすることになりましたが、ゲー研のみんなにはテニサーに入ったことは言えずじまいです。なんだか後ろめたいというか裏切っちゃったようなきがしてしまったからです。



テニサーの先輩たち、特にキムラ先輩にはあれからも良くしてもらっています。はじめはすこし脅しも入っていましたが、結局わたしがテニサーの部員として活動をきちんとし始めたことでみんな優しくなりました。それでも都会のエッチな習慣には慣れません…。

でも、テニサーにしていると会話の気まずさとかがなくて気楽なのも本当です。

ゲー研の方はオンラインでチャットしているときは普通なのに、部屋で顔を合わせるのと未だに気まずさが残っていてどう会話をすればいいかわからない微妙な距離感のままなんです。

そして夏休み。ゲー研は毎年夏の間にゲームの統計データをまとめて取るための合宿をするみたいです。でも男子ばかりの合宿にわたしが行っても気まずいだけではないでしょうか。だからわたしはゲー研の夏合宿にはいかないと決めました。表向きは実家に帰るからということにして。

その直後でした。テニサーの方から夏合宿に誘われたのは。もちろんゲー研の夏合宿も断りましたし、こっちの合宿もお断りするつもりでした。でもユウコ先輩に出たほうがいいよと薦められたり、キムラ先輩に出なかったら写真をば

らまくというようなことを暗にほめかされたりしたら断れません。結局わたしは「泊りの日のテニサーの夏合宿に参加することになりました」。

夏合宿当日。キムラ先輩が話しかけてきてゲー研のみんなに何か聞かれたときのための言い訳を教えてくれました。嘘を嘘で重ねたでまかせ。でも、その頃にはもうキムラ先輩に言われたことは素直に受け入れる癖がついてしまっていたのです。だってそうしないと脅されたり、怒られたり、辱められるから。

そういうわけでわたしはキムラ先輩に言われたことには素直に従う習慣がついてしまいました。たとえば合宿中はみんな女子は水着で生活するように指示されましたけど、それがサークルの伝統だと言われると逆らえません。そして予想できたことですが、テニサーの夏合宿と行ってもテニスをするのは午前中だけで午後からは海に行つて夜はエッチなパーティーをする毎日でした。

そんな夏合宿の最中、キムラ先輩が言いました。

「そういや、セイナの兼サーしてるとこ、なんつったつけ？オタクがわらわら集まってるキモいところ。あんなところでも夏合宿あったんだろ」

「え？…はい」

嫌な話題が振られたと思いました。というのもたまたま合宿の日程が二つのサークルで重なっていたからです。

「つで、セイナは行かなかったってわけだ。オレラとのパコハメ合宿のほうがそりゃあ楽しいもんな」

そう笑いながらいうキムラ先輩の声を聞きながら罪悪感で胸がキュツとなりますがうつむき加減で答えます。

「…はい」

「うは、マジでーんじゃ、挨拶しないとな。『セイナはテニサー優先してパコハメしまくってます。ゴメンネー童貞くん達』って謝んなきゃいけないじゃん。よしっ決めた。今すぐ電話しろ」

そんな酷い思いつきを決めたキムラ先輩がわたしのハンドバックをゴソゴソあさって携帯を出してしまします。

（ボイスドラマ第12章）

そして先輩にセクハラされながらゲー研に電話して、その後ハメられてしまつて息も絶え絶えなわたしにキムラ先輩がいます。

「セイナもだいぶオレラのノリに慣れてきたじゃん。つつーわけで夏デビューしよーぜ！」

絶頂して息が整わないわたしにキムラ先輩がそういつて頭をなでくれます。なんだかわたしを認めてくれた気がして思わず嬉しくなっちゃいます。そしてキムラ先輩にささやかれるままに先輩の命令に従つて準備します。

ロッジのリビングルームには二人ぐらいのテニサーの男女がいます。男子はの人でみんなイケメンのセンパイたちです。女子は二人が一年生で引率代わりにユウコ先輩がきています。女子は一年生の中でコミュ力低めの女子が多いです。わたし達がりビングルームに入るとテニサーの男子のセンパイたちが口々に文句を言います。

「おせーよ、キム！お前だけ抜け駆けしてんじゃねーよ！」

「わーつてゐるって！つーわけで今日から合宿二日目、本格的に遊ぶわけだが、半日外遊びして夜にパコハメするだけでお前ら満足かあ？」

キムラ先輩が煽ります。

多数派の男子のセンパイたちがブーイングを飛ばします。

「そこで、セイナからオレラに提案があるみたいだぜ。ほら、言つてやれ」

キムラ先輩が言つて、わたしの手の甲を持ち上げます。そこにはキムラ先輩が書いたわたしの言うべきことがメモしてあります。

全員の視点がわたしに集中します。何を言うのか興味津々な感じですよ。男子の視線は特にさつき出されたわたしの胸のザーメンに集中してしまいます。すごく恥ずかしくて、もじもじ内股で固まってしまいます。

「ほら、言つてやれよ。セイナの覚悟を見せてやれよ！」

力強くキムラ先輩がわたしにささやきます。

「えっと…その、先輩方、わたし達女子の水着姿で挑発してしまつて…ごめんなさい…。でも、これからは…我慢しないで…大丈夫です。わたしは、先輩方の性処理を絶対に…断りません。その…フリーマンコ宣言します…」

尻すぼみで恐る恐る私はいいました。

「おお、よく言つたーさすがオレラテニサーのメス部員たわ！」

「そー、そー、はじめは怖いけど一歩踏み出すのが大切だし」

ユウコ先輩を始めとする先輩方が褒めてくださいます。

「ほら、他の一年生達はセイナちゃんの覚悟を見て何も思わないわけ？セイナちゃん勇気を振り絞って言ってくれたのにさ」

そうリョータ先輩が言って促します。すると他の一年生女子もみんな手を上げて立候補します。みんな気持ち的には不安なのに先輩たちの機嫌を取らないといけないから…。

全員がフリーマンコ宣言をして最後にマーカーでお互いのお腹に『フリーマンコ♡』と書き合います。私服は初日に先輩たちに没収されてしまっているのに水着以外ないわたしたちは隠れることももちろんできません。そして最後にユウコ先輩が口を開きます。

「ってわけで合宿残りはずっと女子のオマンコパコハメオツケーだから。よろしくね。ってか昨日の夜もやりまくったのに男子全員おつきくしてるじゃん。男子は水着禁止、すぐに使えるマンコがあるんだから勃起したらすぐわかるようにしようー！」

ユウコ先輩が楽しそうに明るく言つて、隣りにいたキムラ先輩の水泳パンツに指をかけて一気に引き下ろします。その瞬間女子全員視線がキムラ先輩の股間に注がれます。ついさっきまでわたしの中に入っていた肉棒がぼろんと露出します。すごい：あんなに太かったんだ：たぶん女子全員がそう思ったと思います。つづいて他の先輩方が全員全裸になります。筋肉質でスタイルのいい先輩たちの裸が夏の日差しに照らされててかてか光つて、そしてその下半身にぞびえる勃起したモノにどうしても目が行つてしまします。

「じゃあ、これからずつと。パコハメするんだしい、女子も気持ちよくなりたいでしょう？これからみんなで輪になって性感帯チェックしよー！」

あ、キムと。パコハメ抜け駆けしてきたセイナちゃんは罰としてリョータの膝の上に座るつてことでヨロシクー！」

ユウコ先輩がまた楽しそうにいます。一年生女子はお互いに顔を見合わせますがだれもいやとは言えません。というかこの空気の中でそんなの言えるはずがありません。

「おお、セイナちゃん、一緒にすわろーぜ」

そう、年生のリョータ先輩が近寄ってきます。もともと体育会系でこのサークルで一番筋肉がムキムキのちよつと怖い先輩です。その人がわたしのことを抱きしめて座らせます。丸太みたいなガッチリした腕がわたしのお腹を抱きしめています。そして全員が男女が交合になつて車座に座った上で、私だけリョータ先輩に抱きすくめられてしまっています。

「つてか、この合宿の一年女子はさ、みんなこの前まで処女だったじゃん。まだ自分の体のことわかつてないってあーしは思うわけよ！つてわけでこの合宿を通じてみんながもつと自分の体のエッチな部分に気がつけたらもつとエッチが楽しくなるじゃん。つつーわけでえ、これからみんな性感帯を発表してほしーと思いますーす！」

そうユウコ先輩がノリノリで隣りに座っている男の先輩のオチンチンをくりくり弄りながら言っている間も、リョータ先輩は私のお腹を抱きしめてお尻に太いものをグリグリと押し付けてきます。

「つつつてもまだみんなわかんないって思うので、まずあーしからいきまーす。つてか、せっかくだから男子は隣の女子にやってあげてよ。つて、女子の方



は気持ちよかったら愛撫してくれた男子のチンポを軽くシコシコしてやってよ。きもちよかったです、もつとしてくださいーってね。わかったら女子は男子のチンポ握って」

ニコニコしながらユウコ先輩が卑猥な命令を下します。男子もみんな楽しそうだし、「年生女子は伏し目がちになりながらも隣の男子の男性器をにぎってしまします。というか、伏し目がちになったその視線の先にキムラ先輩の太くて熱い脈動するモノがあります。それをわたしも恐る恐る握ります。さっきまでわたしの中に入っていたそれはきれいになっていくわけでもなくてどろどろしたものが指に絡みつきました、

しかもそれと同時にわたしを抱きしめているリョータ先輩が『オレのことも忘れんじゃねーぞ』っと耳元でささやきながらわたしのお尻に熱いものを押し付けてくるのです。

「みんな男子のチンポをよしよしでできるようになったっぽいかな？じゃあまずね、みんなが気づいてなさそうな性感帯ってことでえ、耳をいじってみよーま

ずは耳に息を吹きかけてえ、はんつつ、そのあとにいい舐めてあげてええ……んん  
っ」

そういうユウコ先輩自身もすぐに隣りにいた男子に言われた箇所を責められて、甘い吐息を吐き出してしまいます。

そしてすぐに私も両耳からリョータ先輩とキムラ先輩が甘く息を吹きかけてきます。ゾワゾワゾワツと全身が逆立つような今までにない感覚、そして耳たぶをキムラ先輩が甘噛みします。

「はああんっ……」

思わず反射的に甘い声がでてしまいます。

「ふふ、セイナかわいいぜ」

そう反対側の耳からリョータ先輩が囁いて。ペロツと耳をなめます。両側から耳を舐められて、軽薄な愛の言葉が囁かれます。軽薄だってわかってるのににドキドキしちゃって困ります。

「ふふ、感じたかな？ 感じたら男子のオチンポをよしよししてあげてね。こんなふうにしーこしこって」

いたずらっぽくユウコ先輩が心だけ震えている男子のおちんちんをなでます。わたしも手の中で熱く自己主張しているキムラ先輩のオチンチンを優しくしごきあげてあげます。嬉しそうに先走り液を垂らすそれに少しだけ可愛いと感じながら。

「セイナちゃん。オレにもしてよ。お尻でチンポよしよししてくれよ」

「リョータ、お前ほんとケツ好きだな」

「当然っす。女子の価値は尻の形で決まるっすから、ああ、そこいい。セイナちゃんの尻マジバないっす」

先輩同士がそんな他愛もないお話をしているのを無視して言われたとおりお尻でしごいてあげると、気持ちよさそうに水着越しにリョータ先輩の長いものが先走り液を出しているのを感じてしまいます。

「ふふ、じゃあ次はセイナちゃん。言ってみよっか、イケメン二人に玩具にされてまじ羨ましいセイナちゃんの気持ちいい場所をみんなにおしえて——」

いきなりユウコ先輩に振られて頭が真っ白になります。そしてこれから私が言った場所がこの後愛撫の対象になると思うと、いけないのにゾクゾクしてしまいます。まるでわたしもエッチな人になっちゃったみたいです。

「えっと、あの……ち、乳首とか……」

そういった次の瞬間、両側からキムラ先輩とリョータ先輩の大きな手がわたしの胸を掴みます。そしてわしわしとわたしのおっぱいを揉みしだきながら耳元でキムラ先輩がささやきます。

「やっぱ女はチチだろ。セイナのデカチチ、マジ好きだわ。このデカチチもつとオレが育ててやつから」

そう言つてキムラ先輩の手が水着の中に入ってきます。乳首が慣れた手付きでぐにぐにと愛撫されるそのたびにじわじわ上がってくる快感に体が震えてしまいます。そして体が震えるとお尻に押し付けられているオチンチンがグニグニと先走りをわたしのお尻にひろげて、わたしの手が無意識にキムラ先輩のおちんちんをなでてしまいます。

その後、他の女子達がみんなおつかなびつくりで感じる場所を紹介します。でも、みんな嫌な顔はしてるけど、よく見るとその場所をいじってもらえることにドキドキしている恥ずかしい表情です。

脇を舐められたり、おへそを弄られたり、たっぷり愛撫されたわたしたちは全員発表し終わる頃にはすっかり発情させられてドキドキしてしまっていました。

「どうだったかな、んふう、今まで知らなかった気持ちいゝところ見つかったっしょ？じゃあ…はあはあ…みんなのフリーマンコがどんな感じかチェックしてみよう。おーじよつ、女子はあ、みんな水着をずらしてオマンコくばあてしてみせよう。でえ、男子はそんな可愛いあーしら女子のトロトロおまんこに、…んふう…ガチガチマジ勃起チンポを当てて発情具合をチンポチェックヨロ♡っで、女子はせっかくだからできるだけ可愛く『フリーマンコだよ』ってアピってみようか…ふはあ」

ユウコ先輩自身がすっかり出来上がった感じでそうエッチに指示しながら見せつけるようにお股を開いた体勢で派手な赤い水着をずらして恥ずかしい場所を開きます。そしてその上に先輩の男子が覆いかぶさります。

「キム先輩、オレいいっすか？」

「しかたねーな、リョータが先でいいわ。セイナちゃんの口はオレが使うわ」

そう言うとな、わたしの後ろにいたリョータ先輩が前に来ます。さっきまでわたしのお尻に押し付けられていたリョータ先輩の大きなものが見せつけられるように目の前に突きつけられます。

「セイナ、ポーズ」

キム先輩が隣でささやくとわたしは反射的にさっきユウコ先輩がしたように白い水着を指でずらして恥ずかしいポーズを取ってしまいます。

ニヤニヤしているリョータ先輩のスマホから、当然のようにカシャッとシャッター音がしています。

「これで来年も新歓バッチリっすね」

「あとでシェアしとけよ。可愛い女子を集めるにはイケメンの男子を集めるのが重要だからな。オレラの部員のエロ写真裏新歓用にまとめとけ」

「うっす」

そんな会話が聞こえます。周りを見れば他の男子達にも写真を取られちゃつてゐたいです。いままらですが、こんなのどうしていいのかわかりません。

「先輩、あの…ど、どういふことですか」

キムラ先輩に尋ねます。

「セイナ、台詞が違ふだろ？つてかりョータに言えよ。ホラ可愛くな。新入生はテクがないぶん可愛げマジ大事。ホラ気合い入れて」

「そつすよ、セイナちゃんはなんなんだっけ？」

ニコニコいやらしい笑みを浮かべながらリョータ先輩とキムラ先輩がわたしに恥ずかしいことを言わせようと促します。

「え…あの、フリーマンコ…です」

「そうそう、そういう素直なのマジ大事！つっわけでセイナちゃんのフリーマンコいただきまゝす！」

そう言つてリョータ先輩がのしかかつてきます。

「え…ああ、ひゃああああんー！」

ズブズブと入ってくるリョータ先輩の筋肉質なおちんちん。このサークルの中で一番筋肉質なりョータ先輩に押し倒されちゃったわたしに抵抗できるはずがありません。

「うひょ、さすがに愛撫しまくっただけあるな。もう完全にトロトロだわ」

「あんっひゃああ、い、言わないでえ……んふうう」

「いや、だって本当のことだし。セイナちゃんのおマンコも嬉しそうにオレのチンポに吸い付いてきてるし」

笑いながらリョータ先輩がいます。ほんの一瞬で部屋中が喘ぎ声で充満して、みんな先輩方に犯されて気持ちよさそうに声を上げているのです。

「ほらほら、リョータのチンポどーよ」

そう言いながらキムラ先輩が唇を重ねてきます。先輩の舌が絡みついて、ズンズン突き上げるリョータ先輩のおちんちんがまるでわたしを壊そうとしているみたいです。

「んちゅっつはあんっふああっ、乱暴でえ激しくてええ……んふうしゅごいですう」



キムラ先輩の唇が離れると促されるがままにわたしは恥ずかしい言葉を口に  
してしまいます。

「はあん…しょこ、しょこおおおリョータ先輩のおちんちんついてるううう」

「オレともキスしよーぜ。フリーマンコのセイナちゃん」

そう言つて唇を突き出す。リョータ先輩、そのお口にわたしは自ら唇を重ね、  
媚びるように舌を絡めてしまいました。

「はああん…ああつちゅっ…ちゅぷっ…んふうう。キス好きい…んんはあ…」

リョータ先輩のたくましい胸板におっぱいをこすりつけて腰を振って気持ちい  
い場所にリョータ先輩のおちんちんが当たるようにしながらキスを続けます。わ  
たしよりもかなり大きくて背の高いリョータ先輩の首に腕を回して繋がりながら  
手伸びしてキスをしているとどんどんふわふわした気持ちになつていてしま  
います。

「んん…ちゅぷ…ちゅる…んふうう…ちゅぷっ」

ついにばむようにリョータ先輩の口にキスの雨を振らせながら快感に身を委ねて  
いると、キムラ先輩が肩をたたいてきます。

「オレのにもキスしてよ。おら、リョータもつと倒せ」

キムラ先輩の唇にわたしの口を寄せようとするとうじやないと顔を下に誘導させられてしまいます。

「ちげーよ、口同士のキスはさっきしてやったつしよ。今度はチンコにキスしろつてーの」

「ひやあああん、そ、そんなああ…」

わたしがキムラ先輩の下半身に顔を寄せやすいようにリョータ先輩がわたしを押し倒します。その動作に、いままであたつていなかった深い場所にリョータ先輩のオチンチンがあたつて更にわたしは気持ちよくなつてしまいます。そしてそのまま、突き出されたキムラ先輩の男性器、それもさっきわたしの中に入つて洗われてすらいなドロドロのものにキスをしてしまいます。

「おお、セイナマジ優しいわ。チンコにキスとかオレならぜつてーしねーけど、してくれるセイナ、神じゃね?」

わたしの唇が赤黒いびつな形をした先輩男性器に触れてしまいます。男の人の匂いが濃厚なほどに漂うその部分が唇にそのふわふわした肉の感触が伝わりま

す。そしてキスを下唇が離れるか離れないかの段階でそういつてキムラ先輩がわたしの頭をわしゃわしゃでながらそう言います。なんだかひどいことを言われている気もしますが、褒められているので気持ちがいいです。やつぱりイケメンの先輩に褒めてもらえると女子として嬉しくなってしまうから。」

「おお、チンポにキスした瞬間セイナちゃんキュってしましたす！」

「おいおい、マジかよ。どんだけビッチに出来てるんだ、セイナは。おらおら、チンポだぞ〜！」

そういつてキムラ先輩が腰を振ってたくましい男の人の部分をわたしの唇に押し付けてきます。嫌ですが、リョータ先輩にのしかかれて、組み伏せられているわたしに抵抗することはできません。

「ひゃあああんん…あんっ…はあああん…やめ、やめてくださいい…んんはああ」

口で言っても二人とも止める気配はありません。ふにふにとした肉の感触が唇に押し当てられ、それどころか中に入ってこようとします。

「あつ、キム先輩――またキュってしたつす。やべえつす。もつとやっつけてくださいよ」

「しゃーないな。セイナ、ほら、嫌かも知んないけどうちの女子部員はみんなフエラもできつからな。ほら、口を開けろ、リョータも、もっと気持ちよくしてやれよ」

「うっす」

その掛け声とともにリョータ先輩の腰使いのリズムが早くて浅い部分をまるでゴリゴリ削るような感じになります。

「ひゃあああん…はんっあああん…んんんふうう…」

そして快感のよがり声にわたしが口を開けた瞬間一気にキムラ先輩のおちんちんが口の中に入ってきます。なんとも言えない味、なのにエッチな男の匂いが鼻いっぱいにはひろがって、キムラ先輩の陰毛が鼻をくすぐります。

「ほら、齒を立てるなよ。口をすぼめろ。そうそういい感じだ。やっぱセイナはいい子だわ」

そう言いながらへこへこと腰をふるキムラ先輩。そしてズンズン突き上げてくるリョータ先輩。なんだか、動けない状態でエッチのための人形みたいに扱われているのに、今まででひよつとしたら一番気持ちよくなっているかも知れません。

「ああ、いい。セイナの舌が感じるたびに絡みついてくる」

「こっちもやばいっす。セイナちゃんのマンコがちゅうちゅう吸い付いてくるみたいで、マジばねえっす」

口さえ塞がれて声も出ないのに、息をすればするほどキムラ先輩の匂いが私の中に入ってきて、どんどん男の人に気持ちよくされてしまいます。

「んんんふっ…ふんんっふんんっ—！」

「おお、セイナがイキたがってるみたいだぜ！」

「ああ、オレもやばいっす」

「ってかお前らわかってると思うけど、今日は中出しするだから。この人数で出しまくったらどいつもこいつもザーメン臭い臭マンになっちまうからな」

なんだか朦朧とした意識の中でそんな言葉が聞こえてきますが、意味はもうわかりません。ただ感じるのは突き上げられるリョータ先輩の肉棒のズンズンと

いう深い快感、口のなかで暴れるキムラ先輩のモノ。はんっあああ、いい、いい、しゅごしゅぎるうううと口が空いていたら叫んでいそうなほど全身が快感そのものになって痙攣してしまいます。

「うおっやべえセイナちゃんすげえイってるっすーまるで俺のチンポ搾ってるみたいにキててやばすぎるっす、ああ、オレもやばい、これはやばいっす！」その言葉とともにあんなにグイグイわたしの体を押してきていたリョータ先輩のものが一気に抜かれて、ひくひく震えながら痙攣するわたしの敏感な場所がポツカリと空き、すーすー空気が入ってきて物足りなくなってしまう。

直後わたしの鼻先に押し付けられるリョータ先輩のトロトロのおちんちん。絶頂の余韻で未だにビクビクして体が動かせないわたしのほっぺたに向かってそれが押し付けられます。

「ってか、キム先輩。なんすかそれ、フェラってか単に口に突っ込んでるだけじゃいっすか」

「まーな。むしろチンポでセイナの歯を裏側からコスって汚れたチンポで逆歯磨きってわけだ。チンカスマンカスをセイナの白い歯できれいにこすってな。まー

セイナのマンコがあくまでチンポ丸出しつてのも寒いだろ、だから風邪引かないようにセイナの口の中で温めてたつーわけよ。ってか、こうするじゃん、内側からセイナのほっぺをチンポでつくじゃん」

「うわっなんっすか、セイナちゃんのほっぺがキム先輩のチンポの形に突き出てぶっさ、あつやばい出るう！」

直後。パタパタと私のほっぺたに熱いものが飛び散ります、

「ブサ顔でいくとかりョー夕実は専じゃね？」

「先輩勘弁してくださいっすよ」

「そんじゃっオレは空いたセイナのマンコに温めたチンポ突っ込むわ。セイナなんかやばいぐらいイッてて動けないっぽいから顔で遊ぶんなら今だぞ」

二人の会話が聞こえますがふわふわしてあんまり実感がありません。そしてすぐに、わたしの恥ずかしい場所にキムラ先輩のよくわたしのことをわかってるオチンチンが入ってきました♡。ああ、おつつきい♡

## 九月・キムラ先輩のコミュニケーション向上キャンプ

テニサーの夏合宿が終わってそろそろ一月が経ちます。あの「泊5日の後、女子は全員先輩のお家にそれぞれお持ち帰りされて、結局一週間ほど毎日のようにエッチしてしまいました。それ以来、エッチのハードルが下がってしまったのは確かです。それに、わたし自身が今まで知らなかった気持ちのいいことを知ってしまったというもあります。

6月になつても大学はまだ夏休みです。あれ以来ゲーム研究会には顔を出せていません。EGIAの夏のイベントがあったりしたんですが、テニサーの方で忙しくてあまり、と言つても人よりはやってる方だと思えますけど、できていませんし。

今日はキムラ先輩に渋谷に呼び出されました。わたしとお買い物に行きたいつてお誘いがあったんです。これって、ひよつとして…デ、デートつてことなんでしょうから確かにキムラ先輩とはたくさんエッチしますけど、こんなふうに二人つきりでどこかに言おうなんて言われたのは初めてです。



「ひゃんっ！」

突然誰かにお尻を掴まれて声が出てしまいます。

「セイナ、待った？」

耳元でいまセクハラしたことなんてなかったみたいに囁かれます。待ち合わせの時間は五分も過ぎているのにそれを聞かれるのもちよつと反応に困ります。

「キムラ先輩、あの、遅刻ですよ…」

「他の女子が離してくれなくってさー。セイナを特別扱いするなっつーんだわ」  
そんなふうに言われてしまうと何も言えません。そんなサークルで一番人気の先輩を独占しちゃうんだと思うと、ちよつとくらい遅刻しても仕方ないんじゃないかと思えますし。

「ほら、いぐぞー！」

そう言つてむにむにとわたしのおとなしめのロングスカートの上からお尻を押します。わたしのお尻をわたしよりたくさん触つてるキムラ先輩の手には遠慮がありません。

「クレカ作ってきたよな？」

「はい…」

「おけおけー、今どきクレカも持っていない大学生とかダサすぎるもんな。じゃーシヨッピングに行こーぜ、セイナの新しいクレカもあるしな♪」

そういつていつもの自分勝手な感じでわたしのほったにチュッとキスをします。なんだか普段より人に見られている気がします。やっぱりキムラ先輩がかっこいいから目立っちゃうんでしょうか？

そのままキムラ先輩にエッチないたずらをされつつ、いままでわたし入ったことのないお店を回ります。はじめは値段が高いけど思ったより普通のお店で安心したのですが、どのお店に入ってもキムラ先輩の『これイイじゃん』という服はエッチなものばかりで反応に困ります。

そして夕方になる頃にはすっかりわたしは変わってしまったていました。美容院で髪を染めてキムラ先輩の選んだ明るい茶色にしてもらって、上は白いシャツのみで、エッチな黒いブラが透けて見えちゃってますし（いいじゃん、今どきブラぐらい見せてもふつーだし）、今まで履いたことがないような超ローライズなデニム生地黒ミニスカート（こんぐらいセクシーな方が男ウケはぜってーいい

ぜ)で、とてもごてごてしたベルト(かけーじゃん。いいアクセントだと思うぜ)です。そして歩き慣れないヒールの高いブーツはとても不安定でグラグラするたびにキムラ先輩がお尻を支えてくれます。ペディキュアもマニキュアもキムラ先輩のおすすめのお店で初めてしてもらいました。なんだかユウコ先輩みたいな都会の女子っぽくてドキドキします。わたしがわたしじゃなくなっちゃったみたい、そんな気持ちです。

「セイナ、その紙袋邪魔じゃん。ただでさえ歩きにくそうだし」  
そう声をかけられてわたしははっと我に返ります。

「でもこの中には…着てきた服が…」

「わーってるって。だから捨てちまえて。ほら、そこにちょうどゴミ箱あるじゃん。セイナに似合わないダサイ服なんかあそこにぶちこんじまえて」

わたしの腰に当てられた先輩の手に力が入ります。

「…うん。そ、そうですよね。こんなのダサイですもんね…」

そしてわたしは結構気に入っていた服を渋谷のゴミ箱に捨ててしまったのです。キムラ先輩に抱かれながら。

そしてそんなことなかったみたいになんだかんだ楽しくて、頭の片隅でクレジットカードの支払のこととかは気になるもののやっぱりわたしはキムラ先輩が好きなんだと思います。きつとキムラ先輩もわざわざわたしと一日過ごしてくれるくらいだから…。

そのままおしゃれなバルでディナーをとって、キムラ先輩のお部屋に流れで行くことになります。

キムラ先輩のお部屋は新宿のデザイナーズタワーマンション。始めてきたときはそれどころじゃなくて気づかなかったのですが、夜景が見えてすごくきれいです。

「セイナ」

そうキムラ先輩が私の名前を呼びます。もうそれだけでキムラ先輩が何を期待しているのかわたしはわかってしまいます。それくらいすっかり先輩のことをわたしは知ってしまっていたのです。

先輩の首に手を回して背伸びして唇を重ねます。

「ちゅっ…ちゅふ…んちゅふ…ぶちゅちゅちゅ」

そしてわたしの方から舌を先輩の中に差し入れて先輩が興奮するやり方でキスをします。先輩の手がわたしのスカートの中に入ってきて、さっき買ったばかりのとってもエッチな黒い下着の上からわたしの敏感な場所をなぞります。

「ちゅぷ…んふう…ちゅるるるちゅっちゅぱ…んんふう」

「んはあ…セイナ、すっかりベロチューも上達したな。ほら、キスだけでこんなになつてゐるぜ」

押し付けられる先輩のオチンチンはスカート越しでさえも硬く滾っていることがわかるほどに大きくなっています。そしてそれをスカート越しに感じてドキドキして思わず自分の恥ずかしい場所を無意識にこすりつけてしまいます。

「ほら、まずは口でやってくれっか？セイナ、まだあんま得意じゃないっしょ。特訓だな」

そう言つてキムラ先輩がわたしをベッドの上に押し倒します。わたしの処女が散らされた先輩のベッド、あときはわたしは酔つていて抵抗できませんでした。今は大の字になったキムラ先輩のもっこりとした下半身を自分から優しくマニキュアで塗られた指でなぞつて、カチャカチャとベルトを外します。ズボンの

チャックをおろすと、見慣れた先輩の黒いボクサーパンツごしにツンと先輩の匂いがします。それをまずパンツの上から舌でレロレロと唾液がしみるように舐めてあげます。センパイのボクサーパンツを舐めながら男の人の匂いに腰が揺れてしまうのがわかります。

「すっかりオレの好みを覚えちゃったな。初めてここにきたときはセイナ暴れて嫌だっつてたよな。いまじゃすっかりオレのチンポをペロペロできるいい女つてわけだ」

もっこりと膨らんだ先輩の下着の向こうから私のことを見下ろしているキムラ先輩と視線が会います。先輩の手が伸びてきて私の頭をなでます。満足してくれてるみたいでうれしくて胸がキュンとします。キムラ先輩のパンツに指をかけると布地越しでさえも熱いと感じた男らしい勃起ペニスが堂々とでてきます。

「セイナはどうようこーしてヴァージンロストしたベッドの上でセイナの初めてマンコの相手のチンポしゃぶって」

「え、…あの、わたしも、その…なんていったらいいか…」

「ハハハ、腰ふるのはうまくなってもその喋り方はかわんねーな。陰キャ丸出しじゃん」

キムラ先輩がわたしの鼻をおしっこ臭が少し残るおちんちんの先っぽでグイグイ押しながらそう言います。

「まーそーゆーのもちよろそうだったから楽しかったけど、オレラもそんな陰キャなセイナにそろそろ飽きてきたんだわ」

いきなりのセリフに困ります。キムラ先輩に飽きられたくない、せつかく仲良くなったのに…大学生っぽくBBQもしたし夏合宿もしたしデートもしたし、今どきな感じの女子になれて、うまく行けばキムラ先輩とお付き合いできるかもっと思ってたのに。つい癖で伏し目になろうとした私の顔を鼻にあてがわれたキムラ先輩のおちんちんが押し上げます。

「そう、そーゆーところだって。オレラがうんざりしてるの。そんなキャラがパーティーにいたら盛り下がるじゃん、つつーわけでオレがこれからセイナのコミユ力改善陽キャデビューを手伝っちゃうぜ！」

一瞬何を言われたかわかりませんでした。でもすぐにもっともっとわたしがみんなと仲良くなれることで、飽きられたりしなくてすむのだとわかって嬉しくて、涙がぼろりとこぼれます。ずっとコミュニケーションでもりグセのわたしが変われるかもしれないんです。

「ほらほら、でもさもちろんただつつー訳にはいかないワケ。オレが今後セイナのコミュカインストラクターになるつつー訳だけど、せつかくボランティアしてやるんだからさ、今後はセイナにオレのチンポの面倒見てほしいんだわ。まっ今までとさほど変わらねーか。やりたくなったときは呼び出すからさ、すぐに来てほしいわけ。そんなぐらいいいだろ？セイナがコミュニケーション克服できるつつーならこんなぐらい安いじゃん。

あとさ、セイナは今後オレの言うことは全部聞けよ。セイナのコミュカインストラクターとしてセイナの生活を根本から陽キャパリピに変えてかなきゃいけないだろ？

つーわけで、以上2点がおつけーならオレのチンポにキスしてよ」



そんな勝手なことをキムラ先輩が言っておちんちんをグリグリと押し付けてきます。わたしはもちろん何をされるか怖いですけど、でもキムラ先輩に見捨てられて一生喪女で終えるのはもつと嫌です。恐る恐るわたしの顔に押し付けられている血管の浮き出た硬い肉棒にキスします。

カシャッと音がして目を上げるとキムラ先輩がスマホを持っていました。

「だめだめ、表情硬すぎる。ほら笑顔で、陽キヤはカメラが向けられたらサイコーのスマイルマックスでピースするもんだぜ。ほらもう一回、スマイルスマイル」

勃起した先輩のおちんちんを顔に押し付けられながらそんなことを言われます。でもいま何でも言うことを聞くと云ったばかりなのに拒否することもできず、わたしはがんばって笑顔を作って先輩のカメラに向かって上目遣いでピースします。

「そうそう、オレのチンポに頬ずりしながら笑顔でピース決めるのかマジ楽しそーじゃん。じゃーこれからすることを説明してよ。つつつてもまだコミュ障のセインナじゃ無理だから、オレが教えてやるとおりに楽しそーにいつてよ」

そう言つてキムラ先輩が恥ずかしい言葉をささやきます。

「え、でも…」

「いえよ、ユウコだったら自分で考えてこんぐらい言えるぜ。恥ずかしがつてたら一生陰キャコミュ障ブスのまんまだぜ」

キムラ先輩がおちんちんで軽くわたしのことをはたきます。先走りのエッチな汗が肌について先輩がわたしに期待してることがわかります。

「えつと、あの、これからキムラ先輩の鬼硬デカ…チンポを…セイナのお口でちゅぱちゅぱ…おしゃぶりして、デカチンポとのコミュニケーションを教えてもらいま…す」

「ほら、笑顔」

「えつ、えへへ」

「よし、じゃあしゃぶっていいぞ。適当にしゃぶってる間、オレがコミュニケーションのコツつてやつを教えてやるわ」

キムラ先輩の許可が出てやつとわたしの目の前でお預けにされていた熱いものにござります。すっかり慣れてしまったわたしの口いっぱいにはいるがすす

かり馴染んでしまった先輩の男の臭い。汗と先走りの混じった味は舌を刺激します。

「まずな、コミュニケーションっつーのは相手が望むことをしてやるところから始めるわけよ。ほら、今だってセイナはオレのしてほしいことをしてるわけじゃん、これも立派なコミュ力っつーわけよ。オレも初めてセイナを見たときからわかってたね、こいつ地味なコミュ障ブスのくせに大学デビューしてイケメンの彼氏が欲しいとか考えてるなって」

「んぐ…んぎゅじゅぶぶぶ…んんはあ…じゅる、じゅるるる…ちゅばちゅば」

先輩が上機嫌でコミュニケーションについて語っているのを聞きながら教えられた通りの舌使いでしゃぶります。陰茎の裏筋を舌でなぞりながら茎の部分を甘噛して、ふにふにと陰囊をマッサージします。

「っつーわけで、あのとときレイプしてやったってわけよ。わかるか？相手目線で何をして何を言えばいいか考えるってのがコミュ力上げるコツなわけよ。

じゃ、問題だ、相手目線つーことを考えてここで初めてのファックをキメたことに一言コメントくれや。あ、笑顔忘れるなよ」

あんまりにもあからさまな命令です。でも、わたしが拒否できるはずもないですし、がんばってキムラ先輩に認められるようなコミュ力が必要です。

「えっと、あの…あのときはキムラ先輩にレイプしていただいて…う、うれしかったです」

「まあ、50点つてとこかな。そんな重い言い方じゃ萎えるぜ。ほら、こう言えよ」

そんな…あんまりにも恥ずかしくて女の子が言っちゃ駄目なことを言うように囁かれてしまいます。でも、きつとこれもわたしがコミュ障を克服してみんなに馴染めるようにキムラ先輩がせっかく教えてくださったことなのかも…と思うともうわたしは拒否もできません。そしておそろるおそろる恥ずかしくて下品な言葉を私は口にしてしまったのです。

「あの、…あの時はセイナの、しょ…処女マンプチプチってみんなに破ってもらえたのにーお礼の一つも言えない…こ、コミュ障ブスでえ、…こ、ごめんなきー！セイナほんとはちょー、う、嬉しかったの、えへへ」

「そうだ、チンコ見てみる。さっきより勃起してるだろ。言葉だけでこんなになつたっつーわけよ！」

その言葉とともに突き出されたキムラ先輩のオチンチンはたしかにさっきよりも興奮しているみたいにプルプル震えています。

「おっけー、おっけー。またちょつとどもってたけど、まー合格かな。じゃあ、次の相手目線の練習してみよーぜ。ほら、セイナが初めて俺らとファックしたベツドの上で今度はセイナが自分からオレのチンコお前のマンコで咥えてくれよ」  
「え…」

思わず思考停止してしまいます。

「ほらほら、今までずつとセイナエッチの時はオレにされるがままだったじゃん。それってすっげー自分勝手のコミュ障ブスじゃん。できるオンナってーのは

もつと積極的にさ、オレラのことを思いやってくれるわけよ。つつーわけで、今日くらいセイナが上になつて腰振つてくれよ。腰ふるのだつて疲れるじゃん」

たしかにそうなのかもしれません。エッチのときつて毎回先輩が上になつてわたしは受け身で先輩の気持ちなんか考えてなかったと気が付かされます。それなのに先輩とお付き合ひできると思つてたなんてわたしつて本当にコミュ障ブスです。

わたしは先輩の体の上を這うように登つていつて、恥ずかしい部分を男の人の硬く勃起した肉棒にあてがいます。

「おっけーおっけ、そこですとっ。ふーさっきのもそうだけどセイナはさ、喋り方からもつと変えてく必要あると思うんだよね、オレは。つか、セイナの喋り方とか重くて付き合ひづらいまんまコミュ障じゃん。そんなオンナと付き合ひたいって思ふか？」

そう言つてキムラ先輩がわたしの目を下から覗き込みます。軽蔑したようなバカにしたような先輩の表情はやっぱわたしがコミュ障だからでしょうか。わたしはもちろん先輩が期待することを汲み取つて首を横に振ります。

「んじゃあ、ここってなんていう？」

そういつて先輩が腰を少し動かして熱い肉棒でわたしの恥ずかしい部分を突っつきます。

「え、っと…ヴァギナですか…？」

「だめだめ、イケてる連中はチンポとマンコって言うっていい加減気づけよ。しかも嬉しそうに言うのがコツだからな。じゃあ、もう一回、これな〜んだ？」

そういつてグリグリとキムラ先輩の男の部分が押し付けられます。ああ、こんな恥ずかしすぎる。でも、頑張らなきゃ。そうわたしは覚悟をきめて笑顔を作ります。本当は恥ずかしくてそれどころじゃないのに…。

「はあ〜ん！キムラ先輩のオ・チ・ン・ポ！」

「お、いい笑顔じゃん！大正解、じゃあどうしてほしい？」

「え〜つとお、オ・マ・ン・コしてほしいです」

なんだかわたしの口から出てきた言葉とは思えませんでした。でも、もう数ヶ月テニサーの皆さんと遊んでいるので知らず知らず何を言えばいいかわかつてるのかもしれない。

「おつけー、じゃあ、セイナ右手でマンコ開いて左手でチンポ支えて一氣にいつちやえろ。セイナの初めてレイプしたオレのチンポを今度はセイナが逆レイプするんだ」

はじめての行為にドキドキしながら言われたようにします。先端が指で割り開かれたわたしのおマンコにあたって熱を感じます。

「そーそ、さっき言ったことを忘れないよ。チンポの立場になってどうしたら気持ちいいか考えながらどんどんいれてっよ！」

「んん…キムラ先輩のおチンポ…はあ…熱いです」

おチンポの立場を意識すると必然的にわたしのオマンコを意識してしまうので普通以上に敏感になってしまっとなかなか受け入れられません。こんなのダメなの…。

「んん、セイナの中ど、どうですか？お、おチンポ…ふふはあ…気持ちいいですか？」

ドキドキしながらそう聞きます。なんだか頭の中がおチンポのことでもいい became になったような気がして赤面しながら、ゆっくりとおチンポを加えこんでいきま



す。おチンポが震えるたびに、気持ちいいのかな？それとも良くないのかなって考えて動きます。

「いい感じだぜ、でももつと一気に入れてくれてもいいかも」

「ああああん、こ、こうですかあ」

敏感なのにむりやり腰を下ろして、恥ずかしい声が漏れ出てしまいます。

「おけおけー、そのまま腰振ってみてよ。あ、せつかくセイナが恥ずかしい言葉覚えてくれたし、ご褒美やるわ。これからセイナがチンポとかマンコとか言うたびにオレもセイナのこと気持ちよくしてやるわ」

わたしの中でピクピク震えるゆっくりおチンポの反応を見ながら恐る恐る腰を振ってみます。

「え、あのキムラ先輩のお、おチンポ、ひゃああん、奥まで来てますう」

おチンポと言った瞬間キムラ先輩が下から激しく突き上げてきて、一気にわたしは快感に飲み込まれてしまいます。

「オレラちゃんとセイナのこと考えてたからセイナの気持ち良い場所全部わかるんだわ」

そう言いながらぐりぐりと奥をえぐられると、たったそれだけで気持ちいい感じが一瞬で変わって、声が出てしまいます。

「はあ…あんっオマンコお…いいのお！ひゃああんオマンコおお、キムラしえんぱいのおおチンポ…いいのお」

「ほら、どんなチンポだ言ってみろよ！」

わたしが恥ずかしい言葉を言えば言うほど、下から突き上げられてしまつて、気持ちよくなつてしまいます。でもおチンポのこと考えてあげて、先輩を気持ちよくしないと。そう思つて快感にがくがく震える腰をゆくりと振ります。

「おっつきくてええ、硬くてええ、はあんっ…熱いおチンポおお、ひゃっはあああんん！」

「そうそう、そのまま腰を丸くグラインドさせてよ」

「こ、こうですかあ…あああん、おチンポ…んはああん…の当たる場所変わつたああ！」

先輩に言われるがままに、先輩のお家のベッドの上で腰を振つてしまいます。

「そうそう、じゃあラストスパート行くぜ」

「はいいいい、がんばってええ、腰ふっちゃいますうう！」

一生懸命わたしのオマンコに神経を集中させておチンポのことを思いやりながら腰を振ります。あ、今おチンポ震えた♡ここがいいのかな、子宮口でぐりぐりって擦り上げたら気持ちよさそう。まるでわたしの頭の中がおチンポとオマンコでいっぱいになったように感じながら一生懸命腰を振ります。わたしのオマンコ越しにキムラセンパイのおチンポの形を感じます。裏筋をぞりぞりってわたしの敏感な部分で締めてみます。あはっ♡ここがいいんだ。

「あんんっ、はああ、キムラセンパイのおおチンポおお、わたしの赤ちゃんの入り口にいい…ちゅううってキスしちゃってますうう！あああんっ！イイっ！そこ、そこイイのおんっあはああんっ♡はああんいんっはああああ！」

キムラセンパイのおチンポがわたしの中にずんっずんっって力強く突き上げてきて、わたしも一生懸命オマンコで気持ちよくなつて貰おうと思つてがんばります。

す。でも、気持ちよすぎっておチンポのことしか考えられなくて、もうぜんぜん細かいことまで気が回りません。こんなことならもっとお口でキムラセンパイのお

チンポおしゃぶりしてどこがきもちいいのか、どんなかたちなのかちゃんと覚えておけばもっともつとキムラセンパイに気持ちよくなってもらえたのに。

「おら、そろそろオレもイきたいからさ、セイナももつとガンガン腰振ってくれよ！」

「っはああんっ、ハイいいーがんばりますっんー！がんばってええええええ、腰をおお！振っちゃいますうううう」

結局もう訳が分かんなくなりながら無我夢中で腰を振ります。センパイのどんな腰を振ってきて、もうまるでわたしの体がセンパイのぶつといおチンポで全身貫かれて頭の中までおチンポ一色にされちゃった気がします。

「はああんっ！やばいいい、おチンポ♡イイイいいい！ひゃんっはああんっおチンポっおチンポっおチンポ！デカチンポおおおお！おっ、オマンコおお気持ちよすぎてぶっ壊れそうなののおおお！」

「おお、セイナ、ぶっ壊れちまえ！ぶっ壊れたらオレが作り直してやつから。ヘンタイオマンコ大好き♡セイナにな」

「しょ、しょんなああああーだめっだめっ、壊れたくないのにいいオマンコよしゅぎるううううー!」

「ちげーよ、そこは壊してくださいだろーが。これだからコミュ障ブスは!」

「ひゃあああんっ、イツちゃうイツちゃうイツちゃうってるううう!わたしのオマンコ壊されちゃってりゅうううううう」

絶頂に全身を痙攣させながら快感に意識が真つ白になってセンパイのたくましい胸板に倒れ込んでしまいます。ああ、キムラセンパイの臭いに包まれながら幸せがわたしの下半身にあふれてじんじんするまどろみに身を委ねてしまいます。

「セイナ、オレらハロウィンにコスプレ乱交パーティーするんだわ。とーぜん、セイナも参加するべ。そんなときはメイド服でヨロシク、セイナだってオタクだしそういうの得意じゃん」

そう耳元で囁かれちゃうともう抵抗も何もありません。ただただ、キムラ先輩のお願いを聞いてあげたくて仕方なくなっちゃいます。

十一月：セイナのスペシャルバースデーパーティー

今日はわたしの誕生日です。そしてキムくんと一緒に準備したテニサーのセンパイみんなへのわたしの感謝パーティーです。

わたしは自分の下宿のドアの前でキムくんがサークルのみんなに今日の説明をしてくれるのを聞いてドキドキしながら入るタイミングをはかります。余興のために今日はわざわざ高校の時の制服を来ています。でもキムくんとエッチすぎて体型が変わっちゃったのかちよつきついかも。

「お前ら、今日はセイナの誕生日パーティーに来てくれてありがとう。ってか、オレが言うのもおかしいか。まっ、今日はただの誕生日パーティーってだけじゃなくてさ、オレがセイナをちゃんとオレラにふさわしいギャルビッチ部員に調教したってプレゼンパーティーなんだわ。つつーわけでみんな気にしないで楽しんでくれよ！セイナ、マジやべーから」

そこでキムくんが扉を開けます。

「センパイ、セイナのお誕生日会に来てくれてありがとう☆

今日はあ、セイナの誕生日だけとお、コミュ障ブスだったクズオタク女子のセイナをお、レイプしてイケイケ陽キャビッチになれるようにしてくれたセンパイたちにい感謝する日にしたいんだー、イエー！」

「見てみるよ、セイナ。もう完全にイケイケじゃん。サイコーにいい感じだぜ！」

そう言つてセンパイがわたしのスカートをめくりあげます。

「ありがとー、チュ」

スカートを捲つて『レイプしてくれてありがとー』と手書きで書かれた無地のパンツをみんなの前に公開しちゃつてるキムくんのほつぺたに軽くキスします。

「今日はあ、セイナがロストヴァージンした日にいたセンパイみんなに集まつてもらいましたあ。みんな、セイナのはじめての大事な人達だからあ、感謝の気持ちでみんなにはこれからずっとフリーエッチ宣言しちゃいます！イエー！」  
わたしが笑顔でピースサインを振りまくと、みんなびつくりしたみたいで『マジかよー』とか言っちゃつてて期待通りの可愛いリアクションです。

「つでえ、みんなの手元にはプレゼントが2つあるよね？小さい方を開けてみて、セイナの部屋の合鍵はいつてるかな？セイナのことを変えてくれたセンパイたちにセイナからの誕生日プレゼントでーす♡セイナがラブなのはあキムくんだけど、みんなだったらエッチもせんせんオツケー☆ウェルカムだよー」

キムくんがスカートをわたしに持たせて、今度はお尻をもみ始めます。すっかり馴染んだキムくんの手がむにむにわたしのお尻を揉みしだいてパンツの上からいたずらしてきます。セクハラスキンシップマジ大事なので、喋りながらお尻をふりふりして楽しんでることを伝えます！

「つてか、今日はセイナの誕生日だからみんなプレゼントとか考えたと思うんだけどお、そういう面倒くさいの大丈夫だよーみんなが気を使わなくていいよーにセイナ自分の誕生日プレゼント自分で用意しちゃいました☆相手目線チョー大事！気も使わなくてもいいし、お財布にも優しいセイナちゃんいいオンナじゃん。つてーわけでえ、リョーくん、プレゼントくださいよお」



わたしが自分で準備して買っておいたプレゼントをリョータセンパイにねだります。まー、中身よりも男のセンパイにプレゼントしてもらうってのが女子的にはステータスで重要なんです。

「え、オレ？ うつつす、じゃあ中に何入ってるか知らないっすけど、セイナちゃん誕生日オメッす。今度大学で抜いてもらってもいいっすか？」

そう言いながら、リョータセンパイが包みをわたしてくれる。以前は筋肉ムキムキでちよつと怖いと思ってたけど、見方を変えればちよー勢いのある逞しいエッチができる頼れるスポーツマンのセンパイってことだし、サイコーっしょ。

「えっ、口でそれともセイナのマン穴？ どっちでもいいです！  
プレゼントは何かなあ？ ああ、『シャツじゃん。ちよーかわいい！ じゃー、着替えるねー』」

それはわたしがユウコセンパイとプレゼントを買いに行つて選んでもらったセクシーキュート系の『シャツで、なんと下乳が見えちゃう系の激ヤバセクシースタイルです。しかも上乳の部分にピンクで可愛く「Easy Hole♡」とか書かれて、こんなの来てたらずぐにレイプされちゃうようなヤバ楽しいシャツです。

「じゃあ、高校の時の地味なセーラー服はセイナにはにあわないからポイってしちゃいますね。でもでもコスプレエッチがしたかったら言ってくださいね。セイナ頑張っちゃいますから」

っていうか実際キムくんとはもう何度もセーラー服でコスプレエッチしまくっちゃってるし。こーゆーエッチできるのって十代の特権じゃん。

そしてセーラー服を脱いで、その下のお母さんが買ってきた地味なブラをゴミ箱に放り込んで、もらったばかりの新品のビッチョシヤツを着ちゃいます。つか布地の上からでも乳首透けちゃってマジウケる。

そしてそのままプレゼントの開封が進んで、どんどんビッチになっちゃいます。しかもプレゼントしてくれるセンパイがわたしに着せたいと言ってくれたので、余計にエッチな感じです。膝丈のプリーツスカートを男のセンパイたちがわたしに着せてくれます。なんだか王子様に囲まれるお姫様気分で嬉しくてお尻をふりふりすると、みんな容赦なくセイナのお尻をさわわしてきます。なんと言ってもこのスカート、お尻の部分がハート型に大きくくり抜かれていて、わ

たしのお尻が丸見えなのです。しかもスカート自体も薄い生地なので、生地越しにくくりくりオマンコをいじられるとシミが付いちやいます。

もちろん、みんなへのメッセージカード代わりの白パンツもメッセージカード代わりにする以外使いみちがないのでゴミ箱行きで、代わりに黒いフリフリがついたショーツが男のセンパイたちの手で着せられちゃいます。ってか、みんな着せながらわたしにクンニしてくるのすっごいうれしい。センパイたちなりにわたしの氣遣いにお礼してくれてるんだって感じられます。

ニーソックスだけが高校時代のままで、正面からは白い清楚なブリーツスカートスカート、後ろからはスカートからくり抜かれたお尻が黒いオープンショーツで飾られてるのが丸出しのケツだしビッチで下乳丸見え乳首スケスケの Easy  
「E」なイケイケに生まれ変わっちゃいました♡センパイたちのおチンポもズボンの上から丸わかりなくらいガチガチに勃起してます。

「みんなー、プレゼントありがとー。みんなと仲良くなれてえ、セイナーチョーハッピーだよ！」

セイナはじめはあ、びつくりして泣いちゃったけどー、今はテニサーのみんなにカビの生えた処女マン開けてもらって、オマンコ大好きな大人のギャルに変えてもらったこと、ちょー感謝してまーす。キムくん、コミュ障ブスだったセイナのことみつけてくれてサンキューベリーマッチ！

んちゅっぷくちゅ」

そう言いながらやっぱり一番大好きなキムくんにキスをします。キムくんのタバコ臭い舌も始めは嫌だったけど、嫌だっと思ってわたしが自己中だっけ教えてもらってから大好きになっちゃった。そして、キスをしながら、ゆっくりと手をキムくんの下半身におろしていったくましい体を指で感じながら、ズボンのジッパーを下ろして、いつものよく知ってるキムくんの男の部分を引き出します。ほのかに香るザーメンとおしっこの臭い、反射的に胸がキュンとトキメイちゃいます。

「んちゅ…ちゅるるるる…ちゅぷぷぷはあーキムくんのキスセイナだーいすき♡

今日はあセイナの19歳のたんじょーびでーす！っつーわけでセイナはあ、10代最後の1年を。パコ。パコハメハメ、セイナを見つけてくれたテニサーのみんなとハメまぐることを誓いまーす。

ってか、この格好少し寒いんでえ、暖かくなることしたいな♡  
そう言つて、みんなの下半身に視線を送ります。

「セイナ、せっかくの誕生日なのに、ろうそく一本でいいのか？」

そうキムくんがおチンポを突き出しながら言います。さすがキムくん、盛り上げるのうまいです。

「ダメでーす！セイナのお誕生日はあぶつというろうそくもつともつとベッドの上に立てたいでーす。リョーくん、ベッドの上に座つてよ。ほかのみんなもセイナのベッドにいらつしゃーい。あ、このベッドも今日で最後でえ、これからはもつというろ遊べるキングサイズのベッド入れる予定でーす！」

「セイナマジ太っ腹じゃん！」

「もー、キムくんがキャバクラのバイト紹介してくれたからじゃん」

「でも、コミュニケーションの練習になったつしょ？」

「まーそうですけどお。」

リョーくんのおチンポろうそくセイナのために立ててね」

そういつてリョーくんのズボンのチャックを下ろして硬く勃起したおチンポを優しく引き出して、待っている間に萎えないようにチュツと亀頭にキスをして舌でチロチロと尿道口を刺激してあげます。これからオマンコすることになるおチンポなのでできるだけ形を覚えて気持ちよく感じそうな場所をイメージしておきます。ちなみにいちばん大切なキムくんおチンポはもちろんずーっと握ってよしよししてあげちゃいます。

そして、六本のおチンポろうそくがわたしの部屋に林立してオスの臭いが部屋中に充満してむらむらしちゃいます。

「みんなのおチンポもーバッキバキに硬いねー。これじゃあふーってしても消えないからあ、順番にセイナのお誕生日オマンコでびゅびゅって出させて消してあげちゃうねー。キムくん、どのおチンポを最初に頂いちゃえばいいーと思っう？」

もちろん、こういうことはキムくんに聞いておきます。だってうちのサークルで一番偉いし、わたしのことを変えてくれたステキなセンパイだから。ってかキムくんのおチンポが最初がいいよ。

「やっぱリョータじゃね？最近別サーの女子紹介してくれたしな。それからヤマギシかな、この間サークル活動費多めに出してくれたからな」

「はーい、じゃーね、リョーくん。よろしくね」

リョーくんの隣りに座ってそのわたしの親指の倍はありそうなおチンポをなでながら、背伸びして唇を重ねて、舌を差し込み、ちゅっ…ちゅぷぷ…ちゅるちゅる…んちゅふふっ…と一生懸命キスをします。その最中にわたしがおチンポを握っていた愛おしい人が言います。

「おいおい、セイナ、そろそろオレのチンポ離してくれよ。これからユウコと合コンなんだわ。付属校の三が来るらしいから行くしかないっしょ！」

「え、キムくん…」

思わず真顔になってしまいます。

「セイナには今日さんざん学校でハメてやったろ。ってかほら『相手目録』忘れてんぞ。リョータ困ってるだろーが。っつーか、今更嫉妬とか陰キャっぽくね？そーいうのなのが陽キャビッチだろ、セイナ？」

キムくんの言葉がわたしに刺さります。でも、えつと……どうすればいいんだろ……頭の中で混乱して、最後にわたしの口から出てきたのは、

「あは……、そーでしたあ。セイナまだまだ練習足りないコミュ障ブスが残っちゃってましたー。ごめんね。キムくん合コン行つてらっしゃい、かわいい♡とやりまくれるといいね」

そういつて笑顔を作りました。

「そーそー、そーしてればセイナかわいいんだからさ、もー忘れるんじゃないぞ」

そういつてキムくんがわたしの頭をなでてくれます。先輩から認められた嬉しさでさっきの混乱した気持ちなんかどっかいっちゃって、キムくんに言われたとおりいいオンナにならなきゃと心の中で決めて、笑顔で他のセンパイにいいます。



「キッチンに精のつくセイナの手料理いっっぱい用意しましたからあ、適当に食べてね。セイナはずーっとベッドの上でパコれるようにしてるからさあ♡」

「そつすよ、セイナちゃん。オレのチンポがお預けされて萎えちゃいそうつす」

「あ、ごつめーん。リョーくんのおチンポ元氣になつてよお」

そう言いながら、わたしのベッドの上に座った筋骨隆々のリョーくんの股間に手を伸ばします。ズルムケのイボ付きズルむけ体育会系チンポがわたしのベッドの上でダラダラ先走りをシートに垂らしちゃってます。

「リョーくんのおチンポくん、セイナのおマンコに入りたいんだよね。どーゆー風にオマンコに入りたいの？」

「じゃあバツクからでいいっすか」

「オツケー、リョーくんの体育会系セックスチョー楽しみ。セイナのこと後ろから野獣みたいにパンパンって気持ちよくしてほしーな」

「うつす、セイナちゃんの二番手チンポで思いつきりよがらせてやるぜ」

ピンピンに勃起したおチンポを振り立ててリョーくんが言います。ああん、もう我慢できない。着替えのときからすっかり発情しちゃって、腰も浮いちゃってるのにそんな逞しいのを見せつけられちゃったら…。

リョーくんの言われるとおりにわたしのベッドの上で四つん這いになります。このベッドの上ではまだキムくん以外とエッチしたことはなくて、キムくんはいっつも騎乗位でご奉仕することが好きだから初めて犬みたいに四つん這いになります。

「ってかマジでエロい服だわ。ケツ丸出しのスカートとかビッチすぎるだろ」

「えへへへ、ありがとー。みんながセイナでチンポギンギンになるよーに選んだんだ。もう前戯とかいいからあ、セイナの中にいリョーくんのイボ付きチンポ突っ込んでパンパンしてほしーな」

「いいぜ、一気にいくぜ」

その言葉とともにガッチリリョーくんの筋肉質な手がお尻を掴んで、一気に熱いものが発情しきってトロトロのわたしの中に打ち込まれます。

「はあああんっ、ふ、太いのおお入ってきてる…」

「マジかよ。一気にくわえ込みやがった。夏ハメたときとはぜんぜんちげええ！」

上向きのリョーくんおチンポを膣壁でこすって、ザラザラの感覚を楽しんでもらいながらいたずらっぽく聞きます。

「前のほうがセイナマンコよかった？」

「いや、やべえ、入れる時は一発だったのに締め付けてきやがる。なんだろこのマンコ、くそ、やべえ名器だ！ゾリゾリ裏筋を責めてきやがる。負けてられるか」

そういうと、リョーくんが腰を振り始めます。リョーくん負けず嫌いでかわいいい。

「んふうう、だつて、お、オマンコのお…はあん…使い方もお、コミュ力だつてえキムくんが言つたんだもん。いゝぱいセイナ練習したんだ。毎日大学のトイレでハメパコしてたのお！あんっ♡」

わたしのオマンコがリョーくんのデカチンポでグリグリ拡張されてる感覚がずんずんしておチンポのことしか考えられなくなっちゃいます。『ってか、』と

かチンポのこと考える以外なにか考えること有るの?』ってキム君がなんどもエツチの最中に教えてくれたんです。

「はああん、そこ、そこがいいのおー筋肉デカチンポがあ、突き上げてきてるのお!やバイ、これやばいよおお!か、硬いチンポがあセイナのマンコを押し付けてるのおお」

「まだ始まったばかりですよ!セイナちゃん、今晩はぶっ壊れるまで頼むです!」

ああ、これやバイ。デカチンポの形にわたしのマンコなっちゃってる。ゴリゴリってえ子宮口まで圧迫されちゃってる。すごい、すごい、やばすぎるうう!

「セイナちゃんの中まじやばいっす、みんなに報告しに行こーぜ!」

そういうとりヨーくんはその筋骨隆々の腕でわたしを抱えあげると、つながったまま持ち上げます。重力にしたがってわたしの全身がただ一つ下半身でつながっているデカチンポにはまっています。ぐいぐいと子宮口を突き上げ、まるで全身を下から頭まで突き通されてるみたいになります。それにわたしのことを抱きしめるたくましい腕、汗の匂いも男らしくて、初めて会ったときに怖いと感

じたのが嘘みたいですよ。ひよつとしたら、あのときすでにこうなるのが想像できたから、本能的にこのおチンポにかなわないって怖かったのかもしれない。

「あああん♡ゆっゆっくりに動いてええええ！」

リョーくんが一步步ごとにぶつといるのがゴリゴリって中にはいつてきてわたしのオマンコを体育会系筋肉デカチンポのサイズに広げてきて、キュンキュンしちゃいます。あん、この体位まじやばい、リョーくん支配されてる感半端ない！

まるでリョーくんの体の一部になっちゃったみたいのリョーくんのおチンポの動きを膣奥で、全身で感じちゃいます。

「うーっす、メシとつといてくださいよ」

そう言つてつながったままリョーくんがキッチンの扉を開けます。全員の視線がこっちに向きます。

「おお、セイナちゃんじゃん。デカチンポどーよ？」

そう冷蔵庫をあさっていたセンパイの一人が聞きます。

「あああん！最高ですーリョーくんの体育会系い、んんんふうん、デカチンポにいセイナガチラブちゅうですーあはああ、これまじやばいのおおおん！」

「セイナちゃんのマンコまじやばいっすーキムのおもちゃなかもトップクラスじゃねえっすかーやべえ、チンポが幸福っす！」

「はあん、セイナのお…んんんっマンコもお…はああんーちょーハッピーなお…んんふうーリョーくんのチンポギョッギョってえ…んはああ…気持ちよくしてあげるねえ。んはああ」

そう楽しくおしゃべりしながら下半身に力を入れてリョーくんのたくましくて今まさにわたしのマンコを拡張しちゃってるデカ肉棒を締め付けてあげる。わたしを抱きかかえるリョーくんの顔がとろけそうになっちゃーかわいい。

「くっそー、オレも早くはめてえーわ」「セイナちゃんだけキムのやつに調教されたんだよ！」「セイナちゃん、写真取るから目線ヨロ！」

センパイたちが悔しそうに口々にそういつて、わたしはオンナとしての優越感が下半身からこみ上げてくるのを感じます。

そしてセンパイたちがスマホをわたしに向けて写真とかムービーを撮り始めたので、みんなが楽しくなるようにカメラ目線にピースで舌を出します。

「イエーイー！リョーくんの筋肉チンポゴチになってまーす！はああん！セイナの誕生日マンコセンパイたちみんなでえ、たっぷり味わってねー！」

「くっそエロだわ！おい、セイナちゃん、キス！」

近くにいたセンパイが口を突き出してきて、もちろんわたしはその唇に吸い付きます。やばい、チンポをくわえこみながら別の男とベロチューとか、わたしとんだけモテてるんだろう。大学入ったときにはこんなの想像もできなかったのに。キムくんのおかげでコミュ力上がったからかな。マンコミュニケーションマジ大事！

ちゅっばちゅるぬちゅ…れろれろっ舌に媚びるキスをしてあげているとリョーくんがわたしに嫉妬して言います。

「やべえ、キスし始めてから締りが更に良くなったんだけど。何だこのエロい体は、ちくしょー負けてられるか！」

そしていままで見せつけるためにゆっくりだった腰使いがまた体育会系らしい野獣みたいな激しい腰振りに変わります。全身がゆすられて快感でいっぱいになってキスも続けられなくなつて嬌声だけが抑えられません。

「はああんーああっりょーくんくん！ヤバイ、ヤバイ、チンポつつすごすぎるうー！そこおーそこいいのおおお！じゅんっじゅんってええおチンポきちやつてりゅーうー！」

ああ、すごい、でかすぎてえ子宮口からのスポットまで全部パンパンチンポで圧迫されちゃってます。

「よし、このままイクぞ！」

「はあああん、キテっキテええ」

周りで他のセンパイたちがなんか言っているみたいですけど、それが気にならないくらいにただただわたしの中に入ってるこのおっきな太いものだけに集中しちゃいます。ずんずうんって入ってきて今にも写生しそうな熱く滾ったオスの象徴。



「あああん、ヤバイ、ヤバイイイイ、イツちゃう！セイナイツちゃつてりゆうううう！」

ビクンビクンと快感の津波が下半身から全身を襲って、ポカポカ温かい絶頂の快楽がわたしを溺れさせちゃいます。

「うおおおお、やべえ。セイナのマンコがキュンキュン締まってやがる。すげえつすよ」

そういいながら絶頂で弱くなつたわたしの奥底を容赦なく突き上げて、リョークんのたくましさをわたしの中に刻み込もうとします。

「ひゃあんつつああつ…やあ、今イツたばかりでえええ弱いのおつおお！しょこ、しょこだめええ！」

「おら、もつと締めろや。オレはいつてねーぞ」

「はああんつ、ひゃいいいーがんばりましゅうう！」

口でそういったものの、もう全身の力が抜けてぜんぜん力が入りません。ただ、下半身から来る無限の快感だけがわたしの全部みたいになってます。

「うおおお、セイナイいわ！」

そう言うとともにリョーくんの男の部分が激しくわたしの中でのたうつようにビクビクと震えて、熱いチンポから情熱的なザーメンが吹き出してわたしの中をびゆるびゆるびゆるるるるつといっぱいにします。そのまま、他のセンパイたちがスマホを向けて撮影する中で、リョーくんは床に座り込んで二人でサイコーに気持ちよかったパコハメの余韻に浸ります。でも、すぐに他のセンパイたちの我慢汁が滴るバキバキ勃起チンポが目の前に差し出されて、わたしは反射的にそれにキスしてしまいます。

やばい、今晚すごいことになっちゃいそう♡

あとがき

今回も楽しんでいただけたでしょうか。今回はオタクディスリやコミュ障デイスリがたくさんありましたが、マゾ的に楽しんでいただければありがたいです。最後に少しだけフォローを入れさせていただきます。

セイナは実際そこまでコミュ障ではありませんし、多くのコミュ障と言われる人たちは単純に経験不足で慣れていないだけとおもいます。作中で表現されるキムラ先輩のコミュ障克服トレーニングは実際に私が体験した自己啓発セミナーのカリキュラムをもとに作っていますが、何が問題かわかりますよね？わからないあなた、詐欺とか新興宗教とかブラック企業とかに引つかからないように要注意です。それっぽいことを言われて納得してセイナのようなヤリマンビッチになっちゃうかもしれません。

これの問題は相手の立場になって考えるという一見もつともらしいことを言いながら自分自身の立場を忘れることを暗に要求しているのです。つまり相手の立場に立つて考えて相手のために行動させようとする一方、こちら側の意見も権利も考えずに行動しろってことですね。顧客のためとか、会社のためとか、組織のために、教祖のためとかは状況次第では考える必要がありますが私達自身の立場を忘れる口実にはならないはず。なのにすり替えられて、私達の主体を消す理由にされるとしたら、そんな組織は危険なので近づかないほうがいいです。セイナのようにならないために注意しなきゃいけないってことですね。

いままでも明示しなくても寝取られ系の作品ではこころへんは意識してきましてし、今後も多分ヘンタイオジサンの作品では少なからず意識しますので読者諸氏も、ヒロインのように寝取られないように注意してくださいね。キーワードは主体変容です。「オークのチンポに負けるはずがないだろ!」っとイキついていた女騎士も主体変容すると「オークチンポ最高の――」っとヨガってしまいます。創作と違い現実の私達は私達自身がいかにか弱い存在で有るかを理解していただきますので理解しているがゆえに潰れないように生きていきましよう!

柄にもなく長いあとがきですみませんでした。